事例番号 127　キラリと光るエコロジータウン・内子（愛媛県内子町）

1. 背景

内子町は、愛媛県のほぼ中央部に位置し、松山市から南西方向約 40Km の地点にある人口 2 万人強の町である。2005 年 1 月 1 日に旧内子町、旧五十崎町、旧小田町の 3 町が合併して現在の内子町が誕生している。本事例で主に採り上げるのは旧内子町におけるまちづくりであるが、旧内子町の土地は 70%が山林で占められており、その中心の狭い盆地にまちが開けている。

内子町のまちは小田川、中山川、麓（ふもと）川に沿って開け、上流の山間地との交流で発展し、また、山間地からの農産物を集荷して京阪神に運ぶ拠点として栄えた。四国遍路の経路としても賑わった。

江戸時代は大洲藩の領地となり、和紙と木蝋（もくろう）の主産地として大いに栄えた。そしてそれによる富の蓄積を背景に内子の町には質の高い建築物が連なり、それらは近年までよく維持されてきた。その背景には、内子町では 1762 年（宝暦 12 年）以降は大火がなかったこと、建築物の耐久性、防火性が高かったこと（土壁の効果等）、町割りが山裾の傾斜地であったことから戦後の都市開発の波に洗われずにすんだこと等がある。

内子町は明治以降主に木蝋の生産で経済が拡大したが、大正に入るとパラフィンの普及で木蝋産業は急速に衰退した。代わって製糸業が盛んになり、木蝋の晒し場は桑畑に変わったが、その製糸業も戦後は衰退することとなった。

その後の内子町は 1955 年（昭和 30 年）に周辺4カ村と合併したことにより農業が主産業となり、葉たばこや果樹、椎茸等の栽培が行われている。近年では若者の流出、人口の減少、高齢化の進行、第一次産業の縮小等により、まちの存続が危ぶまれる状況に至った。1960～70 年代には町の人口は毎年 400～500 人も減るようになり、このままでは「10 年経つと 5,000 人近くの人がいなくなる」との危機感が持たれるようになった。その状況を打開するために取り組まれ始めたのが、町並み保存を中心とするまちづくりであった。

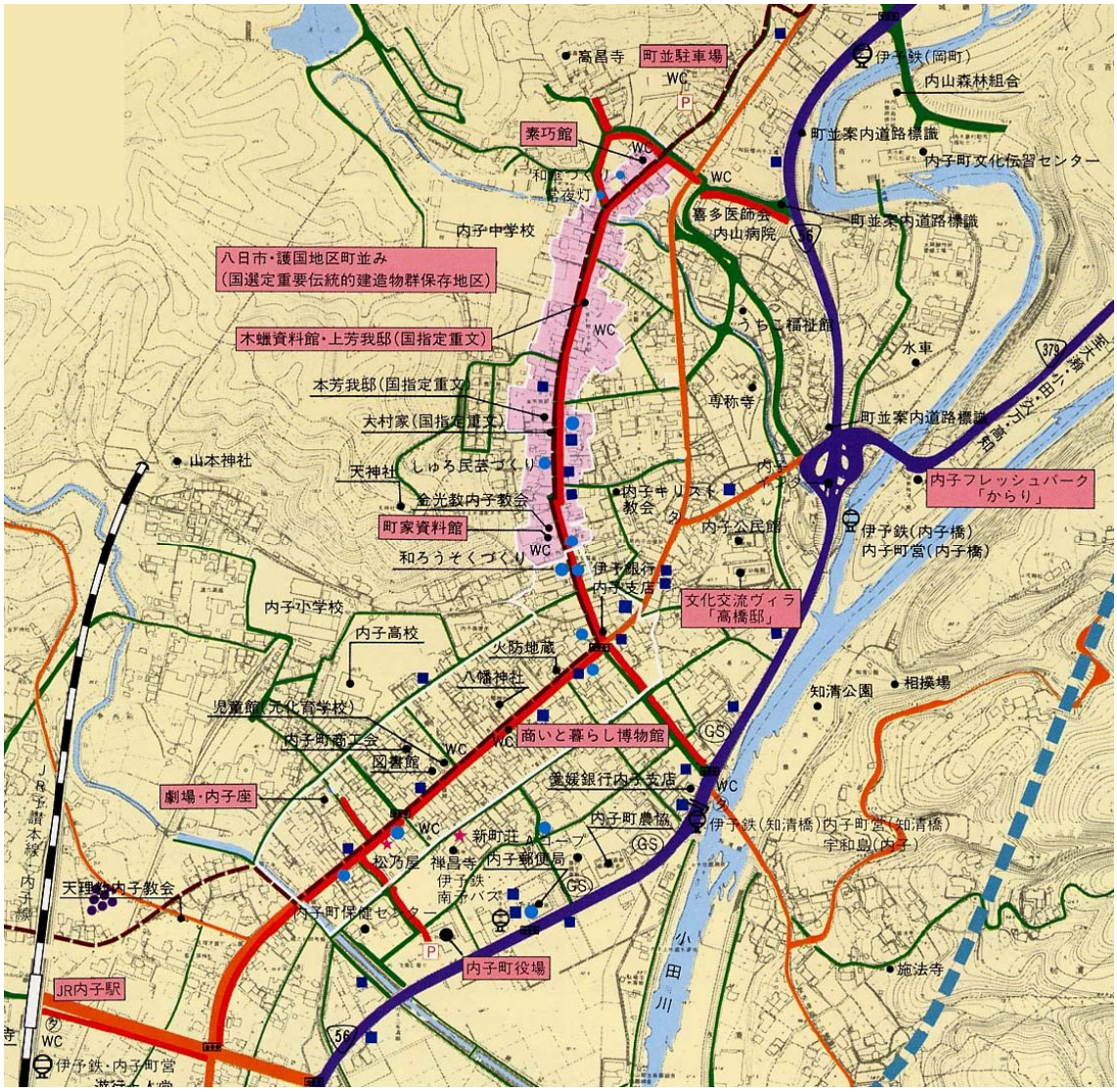
内子町の位置　（資料：内子町ホームページ）

2. 目標

合併後の内子町は「キラリと光るエコロジータウン・内子」をまちづくりのキャッチフレーズにしている。小田川をはじめとする豊かな自然の中で、町内各地の特色ある地域文化を大切にしながら、小規模であっても、生き生きと輝く町をめざすということである。

3. 取り組みの体制

住民と行政との協働によりまちづくりが進められている。



内子町の中心部　(資料:内子町)

4. 具体策

(1) 八日市・護国地区

内子町のまちづくりは中心部である八日市・護国地区の「町並み保全」から始まり、それが周辺の「村並み保全」へと広がった。八日市・護国地区は江戸時代の旧街道(大洲街道)沿いの地区で

あり、約 600mの通りに約 120 棟の建築物が建ち並んでいる。そのうちの約 90 棟が伝統的な民家であるが、その特徴は、浅黄色と白漆喰で塗り込められた重厚な大壁や袖壁、なまこ壁等にある。八日市・護国地区における町並み保存の経緯はおおむね以下のとおりである。

1975 年	まちづくりをテーマに町が町並み保全運動を開始
	住民との対話により町並み保存について合意形成を図る。
1978 年	「町並み保全のための助成制度」創設（町単独）
1980 年	「上芳我邸」（豪商の邸宅）が保存地区の拠点としてオープン。
	（現在の「木蝋資料館」）
1982 年	「保存地区条例」制定、重要伝統的建造物群保存地区に選定される。
1985 年	「内子座」（大正時代の芝居小屋）を修復（全国でも珍しい木造架構建築）
1986 年	「内子シンポジウム'86　まち、暮し、歴史」開催（ローテンブルク市長を招く）
	「潤いのあるまちづくり」で自治大臣表彰
1987 年	経済同友会から「美しい都市づくり賞」受賞
1988 年	山本有三記念「郷土文化賞」受賞
1989 年	八日市・護国地区で電柱の撤去
	建設省「手づくり郷土賞」受賞
	内子町美しい景観建造物デザイン賞表彰実施要綱制定
1990 年	大村家、本芳我邸、上芳我邸が重要文化財に指定
1992 年	伝統的町並の保存再生で「サントリー地域文化賞」受賞
1994 年	八日市・護国地区が「都市景観大賞」（景観形成部門）受賞
2000 年	内子町が「世界に開かれたまち」として地域づくり自治大臣表彰
	「八日市・護国町並保存センター」オープン
2001 年	内子町が「優秀観光地づくり金賞　総務大臣表彰」
	ローテンブルク市と友好都市盟約を締結
	「内子町の町並と和ろうそく」が環境省「かおり風景 100 選」に選ばれる

八日市・護国地区の町並みは、町の内外において以前から多少の関心はもたれていた。1972 年には文化庁の第一次集落町並調査が実施され、1974 年には内子町教育委員会等が町長に対して町並保存推進を提言し、1975 年には「アサヒグラフ」「遠くへ行きたい」（読売テレビ）等でとりあげられ、同年には八日市の町並を保存するための組織ができている。

「内子座」は、和紙と木蝋の生産で富を蓄積した町人が 1916 年（大正 5 年）に建てた劇場である。主に大阪歌舞伎や人形芝居が上演されていた。しかし、活動写真の登場とともに衰退し、商工会館や映画館に転用されたりしたが、1970 年代には老朽化が激しくなり、町が小規模な模様替えを地道に積み重ねて修復を実現した。内子座は転用されていたため既に回り舞台も花道もなかった。広い空間は細かく分割されて会議室に造りかえられていた。土間にはコンクリートが打たれていた。それらを元に戻すために、修復には 3 年も要した（1973 年から 1975 年まで町予算約 7,000 万円を投入）。

町並み保存地区における建物用途の変遷 （資料:内子町）

八日市通り （資料:内子町）

内子座 （資料:内子町）

(2) 石畳地区

まちづくりはまちをつくるだけでは十分ではない。まちは周囲のむらが元気であってこそ元気になる。そのような基本的な考え方から、「町並み保全」は 1987 年以降「村並み保全」に発展することになる。そのその皮切りとなったのが石畳地区である。

石畳地区はまちの中心から北に 12km も離れたところに位置する、棚田の風景が広がるむらである。まちの中心部に向かって流れる麓川には石積みの堰等の古い構築物がある。かつては水車もたくさんあった(30 基以上と言われる)。それらは価値あるものとしては認識されていなかった。その何でもないと思われていたむらの風景を見直すところから「村並み」保存の動きが始まった。その経緯は以下のとおりである。

1987 年	「石畳を思う会」が発足(村の人を中心に男性 12 人)
1990 年	会のメンバーが資金を出し合って手づくりで水車(直径 2.5m)を復元 (水車小屋も手づくりで建造)
1992 年	町の予算で二基目の水車を建設(直径 4m) 周辺一帯を「石畳清流園」として整備 「思う会」中心で「水車まつり」を実施 藁葺き屋根農家(江戸時代末期築)を修復 (「石畳を思う会」の例会開催場所となる)
1993 年	囲炉裏のある古い民家(明治中期築)を隣に移築 (アグリトピア構想推進事業を活用(補助 1,000 万円)、起債 4,800 万円)
1994 年	「石畳の宿」としてオープン(定員 12 人) 村の女性 9 名で「石畳の宿」経営 (地元主婦 9 人が運営、年間約 1.300 人宿泊))

復元された水車(左)と石畳の宿(右) (資料:内子町)

(3) 成留屋地区

「石畳を思う会」の活動が他の「村並み」保存と連動してきた。成留屋地区では過疎化が進行し、地場産業である建築業も衰退していたが、同地区出身の大江健三郎氏が 1994 年にノーベル文学賞を受賞したことが契機となってまちおこし運動が始まった。その主な経緯は以下のとおりである。

1995 年 「内子町大瀬・成留屋地区 HOPE 計画」策定
1998 年 「大瀬の館」をオープン
　　旧大瀬村役場をゲストハウスや住民活動の拠点として改修整備
1999 年 「街なみ整備環境整備事業」開始（民家修復、道路・公園整備等）
2001 年 「内子住まい塾」開始（日本の木造建築の研究、専門家育成）

(4) その他の施策

① 農業の振興

1996 年 「内子フレッシュパークからり」が開設された。これは地元の人々が担う農産物直売所である。350 戸の会員による「直売所運営協議会」が運営しており、規格化、農薬化された農業から顔の見える農業への転換を目指している。販売額は初年度 9,300 万円、2002 年度 3 億 8,883 万円となっている。1993 年に策定された「内子町新総合計画」では「エコロジータウンうちこ」をキャッチフレーズとしているが、そのひとつのあらわれであるとも言える。

② 7 つのシンボルプロジェクト

合併後の「新内子町」の魅力づくりのために、内子町は、7 つのシンボルプロジェクトの実現を目指している。

1) コミュニティバス
　町内全域を視野に町民の足として運行経路等を柔軟に見直す公共的バス運行をめざす。
2) 市街地整備
　各種の文化的機能や集客機能の整備を進める。
3) 龍王再開発
　温浴施設、緑、広場、展望台などで構成される町民のための施設として再開発する。
4) うちこツーリズム
　歴史的町並みを生かした「町並み観光」、農山村の環境や文化を生かした「村並み観光」、小田深山の自然を生かした「山並み観光」（グリーンツーリズム）、地産地消を中心とした農林産物を媒介とする交流農業など、独自の資源や条件を掘り起こし、それらを組み合わせた「うちこツーリズム」を展開する。
5) 小田深山保全
　小田地区のシンボル「小田深山」を、自然環境豊かな内子町の「山並み保存」のシンボルとして位置付け、その存在と意義を広く町内外にアピールする。

6） 地域自治システム

住民主体の地域活動を促進するとともに、地域組織強化や活動支援を行い、地域住民の「自治力」強化を図る。地域づくりのための資金のひとつとして「地域づくり振興基金」（仮称）の積みたてを検討する。将来的には、地域の問題は地域で相談し、地域で対応策を決定し、地域で実行するという地域自治システムを構築する。

7） 地域経営型行政（行政改革）

行政評価制度の導入、事業や施設の統合再編、外部委託（地域住民や民間企業などへの委託）の推進、住民と協働でまちづくりを進める職員や経営感覚のある職員の育成など、従来の「役所」から脱皮する改革を進める。

5. 特徴的手法

地域に根差した豊かな哲学があったことが大きな特徴である。

6. 課題

哲学を次代に引き継いでいくことが大切である。

（参考・引用文献）

内子町ホームページ
岡田文淑氏ホームページ（特に 2005 年 6 月 4 日の「西村幸夫町並み塾」講演記録）
亀池宏『まちづくりロマン』学芸出版社、2002 年
国土交通省総合政策局事業総括調整官室『自立型地域コミュニティへの道』ぎょうせい、2004 年
国土交通省都市地域整備局都市総合事業推進室監修『「元気なまちづくり」のすすめ』ぎょうせい、2004 年
日本建築学会編『まちづくりの方法』丸善、2004 年